



40

麻生区
文化協
会報

仁王門から境内を望む

絵と文・佐藤英行

早春

夏菟山修廣寺を訪ねて

なつかしきさんしゆこうじ
 総門（元禄八年一六九五年に建造）をくぐり、水仙の芽が顔をだす土手状の参道を昇りきると、左側に仁王門があります。

門前の大きな石碑は、「夏菟塾」の門弟（片平学舎等の卒業生の内、さらに高い教育を求めた者）たちの義僊・祖関・両氏に対する報恩碑だそうです。

仁王楼上に十六羅漢があり、そこをくぐり静かな境内に入ると、白梅紅梅が色どり春の香りでいっぱいです。

本尊は釈迦像で、御前立として薬師像が安置されており、寅年ごとに開帳される寅薬師として有名です。寺宝である「大般若経六百卷」も常時本堂に収蔵されています。禅寺らしく内陣左上には達磨大師像が、右上には大現修理菩薩像があります。

本堂の右手高台には鐘楼があり、これは弘化四年（一八四七）に改鑄されたものです。

気軽に一度訪れてみてはいかがでしょう。



成年の初夢 ―犬の文化と私―

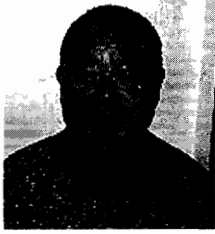
内野 勝雄

今年も戌年。皆様の愛犬もよい年を迎えたことと思います。犬の医療の発展と飼育管理の向上により、犬は健康で長生きをするようになりましたが、戌年を二回迎えられる犬は少ないと思います。

私は昨年、陶芸作品で県展に入選、市美展では奨励賞、福島県石川町でのミニ窯大会で窯の部、作品の部でそれぞれ優秀賞を受賞しました。これは、ミニ窯を作り焼成し、愛犬をモチーフにした犬の置物を完成させるという、戌年に向けてのアイデアの成果でした。

愛犬と日常

私の犬は大型で真っ黒。毛の長いフラットコート。これが三頭です。いつも私のそばを離れず、制作をしようと立つとすぐに付いてくる甘えん坊です。私が轆轤の



前に座ると、三頭は後ろにひかえてすぐ寝てしまいま

す。

犬の散歩は愛犬のためだけでなく、私にとって気持ちのよい一日の始まりでもあります。早起きし、うまい空気を吸い、会う人といささつをする。会話が弾みますし、これは健康の秘訣です。

三頭は散歩をせがんだり、ときには作品にいたずらをすることもありませんが、私が帰宅すると家族より先に玄関まで迎えにきます。また、しばしば私の話し相手にもなってくれて、癒されています。

聴視者の愛犬が登場するテレビ番組で、あの「まさお君」を見ると、どんなに人がペットによって癒されているかが分かります。少子化の時代でもあり、犬はまさに家族の一員です。

「王禪寺ドッグサークル」

犬の散歩をきっかけに犬仲間ができました。その仲間で、公園利用のマナーの勉強会と、公園の清掃を七年前に始めました。

参加する人も増え、五年前に「王禪寺ドッグサークル」を立ち上

げました。この会は、愛犬と楽しく遊ぶことを通じての交流と、地域の人たちとの共存を目的とするものです。大型犬から小型犬まで犬の種類もバラエティーに富んでおり、現在会員は百二十名です。

犬の飼い主でマナーを守れない人はどこにでもいて、一部の人のマナー違反により、犬連れのすべてに非難の声が向けられることもあります。当会は、マナーの向上に努め、犬を嫌いな人もいるということを考えて散歩するよう啓発しています。

また、ボランティアにも積極的に取り組んでいます。犬のしつけ教室、町会やPTAと協力し、防犯ワンワンパトロールを行ったり、大小の犬たちが一堂に会し、和気藹々と走り回る「犬の運動会」を開催したりしています。広報誌とホームページにより、広報活動も行っています。

老人ホームでは、皆さんが私たちの訪問を楽しみに待っていてくれます。お年寄りが犬に癒され元気になっていく姿を見ると、うちの犬も役に立つのだとこちらが励まされます。

昨年十月、この犬たちのために

ドッグラン（犬を放して遊ばせる広場）の開設を実現させました。川崎市ではまだ公設のドッグランはなく、「王禪寺ドッグサークル」が処理センター敷地内スペースを有料で借り、運営にあたっています。一度見においでください。



犬の暮らしもここ十年で大きく変化しました。老夫婦や一人暮らしの人が愛犬を持つケースも増え、おしゃれに着飾った犬も街で見かけます。また、虐待や捨て犬等の問題もあります。飼う以上は最後まで看取る考えをもって欲しいのです。

そんな犬に関する文化の発展を期待して今年の初夢とします。

（王禪寺ドッグサークル会長）

平成十七年度

第十七回 麻生区文化協会俳句大会

実行委員長
馬場身江子

川崎市長賞

端居して此の家のこの先のこと

山口 素子

川崎市議会議長賞

うすれ行く記憶たしかめ慕洗う

松吉清月女

川崎市教育委員会賞

揚花火犬の恐怖を抱きしめる

馬場身江子

麻生区長賞

農継がぬ子ばかり育て葱坊主

白根はる女

麻生市民館長賞

短夜の長きと思ふ看りかな

井田 京子

川崎市総合文化団体連絡会理事賞

故郷が近づいてくる蕎麦の花

市川 紫苑

川崎市俳句連盟会長賞

新涼の水たっぷりと手を洗う

山崎せつ子

麻生区文化協会会長賞

西瓜よの声に脱線縄電車

岡本 芳子

優秀賞

山肌を流れるごとく秋あかね

山口 佳子

広島忌川くろくろと流れけり

大谷 長平

滴りに杉干幹の苔の色

近藤 久生

客人にされてふるさと夏祭

前田 博子

貧しさは語らぬ母なり一葉忌

吉澤 篁村

かぶと虫いつしか村は町となり

関森田鶴子

頑張りの顔もて汗を拭けけり

森 かつじ

老夫婦団扇ひとつを隔て寝

池内 英夫

スケッチの夫にまた足す蚊遣香

山田ミツエ

積りたる雪に雪降る旅の朝

箕輪 玉兆

記憶より細き旧道鬼やんま

田宮 玉歩

炎暑来て骨無き蜻のように座す

村田 雅松

水替へて金魚に留守を頼みけり

森 健二郎

松越しの海にひらきて夏座敷

相田 隼石

盆踊り嫁も姑も一つ輪に

大家 澄子

一兵の検閲はがき曝しけり

金坂 春美

寝転びて一人の宇宙夏帽子

森 健二郎

平成十七年度

俳句講座点描

畔田 二郎

第一回 八月三十日
第二回 九月 六日
第三回 九月十三日

今年も文化協会主催俳句講座は三回に分け実施、会場は満員の盛況であったことを感謝いたしました。

第一回は、俳誌「麦」同人、日本女子大学生涯学習センター、独協大学オーブンカレッジ、NHK

学園俳句講座講師の綾野道江先生に依る「俳句」詠む楽しさ、読む喜び」のお話でした。当日、全員に配布された資料「夏の俳句」

「難読季語の例」を一句ずつ、季語ごとに懇切丁寧に説明され大変勉強になりました。

夏を詠んだ句の例
●万緑をしりぞけて滝とどろけり
(鷲谷七菜子) ●風鈴に風のすぐ来
る路地暮し(菖蒲あや) ●踊抜き阿
波の旅寝の深かりき(稲畑汀子)

難読季語の例
●青饅・天牛・女貞・斑猫・敗荷
第二回は「八千草」主宰で麻生

区の地元の人である山元志津香先生。「季語の伝説的な裏話」のお話で「汨羅の淵に波さわぎ、巫山の雲は乱れ飛ぶ」昭和維新の歌

(海軍中尉、三上卓作詞作曲)で粽

の季語にふれたことは、その導入の見事さに一同感嘆しました。「みなさんの俳句について」(参加者の募集句)は一句一句懇切丁寧に添削をされ心のこもった講評に感謝いたしました。

第三回は「馬酔木」主宰で俳人協会副会長、水野春雄先生の「俳句と食」の演題でした。水原先生は現在、聖マリアンナ医大名誉教授で小児科医。長年にわたって食を医者として観察された眼での講演は、ユニークなもので熱心に耳を傾けました。

当日配布された資料の中の

食を詠んだ句の例
魚介類 ●牡蠣鍋や今宵は雪とうらなひて(秋櫻子) ●木がらしや目刺にのこる海のいろ(龍之介)

甘味 ●妻在らず盗むに似たる椿餅(波郷) ●白玉のよるこび通る喉の奥(秋櫻子)

その他 ●湯豆腐やいのちのはてのうすあかり(万太郎) ●粕汁にあたたまりゆく命あり(桂郎)

郷土を切り拓いた先駆者 中島周策

京 利 幸

現在、柿生の人々に長いこと親

しまれてきた「万福寺の森」が、土地区画整理事業で新しい都市機能を備えた拠点として生まれ変わろうとしている。この森に、四百五十年続く中島家が在り、郷土の発展に尽くした中島周策の眠る墓がある。

多忙を極めるご子息の豪一(長男)氏に時間を割いていただき、お話を伺う機会を得た。

生い立ちと青少年時代

周策は、明治三〇年(一八九七年)九月二八日、農業の父・百之助と母・マサの二男として万福寺二〇〇番地に生まれる。長男が早くに死去したために、長男代わりになり家事の手伝いや弟・妹の世話等大変苦労している。明治四一年(一九〇八)に尋常科(現在の柿生小学校)を卒業後、明治一三年(一八八〇)に設立された東長沼の全寮制の癸疑塾に入った。周策は、この塾での生活と軍隊生活を除いて、万福寺の森を生涯の根城にし

て離れることはなかった。

二四歳になった大正十年(一九二二)、いとこのミサと結婚した周策は五人の子どもに恵まれた。周策の子どもへの躾は、明治の気質にしては厳しくはなく子ども自身の判断に委ねることが多かった。夫婦円満な家庭の中で子どもは伸びと育っていった。

農業と地域活動に勤しむ

万福寺は、昔から農業経営に熱心な土地柄で、特に明治天皇に献上した禪寺丸柿と農林大臣賞に輝いた万福寺人蔘は、県下にその名が知れ渡る程であった。

周策は父の農業を継ぎながら、地域の農家の人たちと県や市の指導・助言を受けながら、農業改良の努力を怠らなかつた。

機械化されるまでの農業を支え活用されていたものに、「水車」があった。柿生郷土誌刊行会「ふるさと」は語る「柿生・岡上のあゆみ」によると、精米や製粉等をするために、中島家では明治の初め

頃に屋敷内に掘り抜き井戸を掘り、山からの湧水と合わせて水車を回した。昭和七、八年頃まで稼動して、精米の販売や揚げ場もあった。屋号は「車」と呼ばれ、印も残っている。

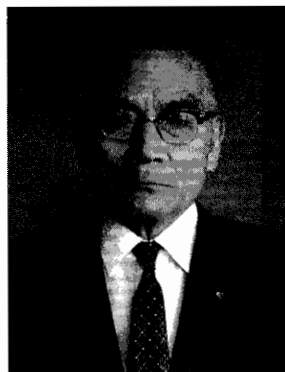
牛や馬も農家の大切な働き手だった。周策は馬が好きだったので、家畜として馬を飼い、田畑を耕したり、荷物の運搬に重宝だった。その馬を乗り回すのが好きで、横浜の六角橋まで遠乗りをしたこともあるという。農耕馬を買いに岩手県や鹿児島県の喜界島にまで出かけた。登戸駅まで貨車で運び、そこから家まで連れ帰った。鹿児島からは三、四日かかり、貨車の中で馬と一緒に寝泊りするの、馬への愛着が一層増し家族同様に大切にされた。馬好きな周策は、川崎市最後の馬匹組合長も務めていた。

周策は農業の傍ら、地域活動にも積極的だった。五力田、古沢、万福寺の部落消防団の責任者とし

て、消防訓練や出初式、火事現場での消火にも活躍した。戦後の困難な時代に、柿生小学校と柿生中学校のPTA会長として、学校再建に取り組んだ。山の上に建つ小学校内に中学校が同居しており、何かと不自由な教育環境にあった。そこで小学校を移転新築するため、柿生地区学校建設促進期成同盟の会長に周策が推された。校舎建設候補地選びや地主・教育委員会等との交渉、署名運動も行い、昭和三四年(一九五九)五月、現在地に移転することができた。移転後の中学校では旧校舎を取り壊し、グラウンドを元小学校の校庭の高さに掘り下げる作業を、PTAや地域の人々を総動員して行っている。

周策の人望は高まり、柿生地区社会福祉協議会長、その他地域の要職を請われて就くことが多くあった。

周策は、そんな忙しさの中にあるながらも、多彩な趣味を楽しんでいる。俳句は若い時からたしなみ、上述した乗馬や家の廻りが山林だったこともあって、猟友会を作り猟を楽しんでいる。また、釣りに多摩川や相模川等にもよく出



かけていた。酒は四十代まで全く飲めず、市議員になり、たしなむ程度までになった。

郷土を背負い市政を担う

周策は、町村制施行した明治二年（一八八九）に誕生した柿生村外一ヶ村組合の村議会最後の議員として奔走した。昭和十四年（一九三九）の四二歳の時である。柿生が横浜か川崎のどちらかに合併するにあたり、柿生住民の強い声を背に受け、飯塚村長と全議員の団結した強い意思が無かったら、今日の柿生は存在しなかった。当初、川崎市は、柿生が川崎に編入することを好まなかったという。村長と全議員の粘り強い交渉が最後は功を奏して、五〇年に及ぶ柿生の村長及び村議会は発展的解消を遂げた。

戦時中、戦後の川崎市の初代市長になった金刺不二太郎が、中島

家に疎開していたこともあり、周策は、昭和二六年（一九五二）四月の川崎市議会選挙に立候補して当選。五四歳の時である。

それ以来、市議会議員として、約一八年にわたり、郷土と川崎市の発展のために、病に倒れ帰らぬ人となるまで市政に生命を燃やして全うしている。

高石の山林と畑の丘陵地が、日本住宅公団によって開発され「百合丘団地」が完成したのは、昭和三五年（一九六〇）であった。川崎市議会は東京の人の寢床になるばかりで、川崎にメリットが無いとして反対意見が多かったという。

そこで、開発にあたり十二人による土地区画整理審議委員会の一人に周策が選出された。関係地主・公団や市等との連絡・調整等に苦勞を惜しむことなく奔走した。「駅前団地」という映画になった百合丘団地が弾みになり団地周辺の山林や田畑を、大・小の不動産会社が宅地化していき、のどかな田園が一変していった。百合丘の開発が、麻生区の今日の街づくりの礎ともいえる。

周策は、議員として十年目を迎えた六四歳の時、これまでの議員

活動が高く評価されて神奈川県、関東及び全国市議会議長会表彰を受賞した。その翌年の昭和三七年（一九六二）から二年間、第十六代の副議長に推されたが、ポケットにはいつも辞職願を入れて仕事をしていたという。

昭和四二年（一九六七）から亡くなる昭和四五年（一九七〇）一月まで第二〇代の議長として重責を全うした。その間の昭和四三年（一九六八）には勲五等瑞宝章を受章した。柿生の人々は喜び受賞祝賀会を催し、柿生の誇りとした。

昭和四五年（一九七〇）の一月十六日、市の消防出初式や成人式等大きな行事が重なり体調を壊し風邪気味の中を、責任感の強い周策は出勤した。同僚等の強いすすめで川崎市立病院で診てもらったところ即入院という事態になってしまった。そして、十七日には帰らぬ人となった。あまりにも突然の訃報に柿生の人々は悲嘆にくれ、悼んだ。

政令指定都市昇格を目前にしての急逝は悔やまれた。二月六日には川崎市民会館（現在の川崎体育館）で、川崎市議会葬がしめやかに行われた。

周策の生涯

周策は、終生、驕ることなく誰とでもどんな相談にも気さくに応じて親しまれ、スケールの大きな人だった。柿生の人々は、何か事があると「周策さんに聞いてみよう！」というのが口癖であった。

明治・大正・昭和という激動の社会に翻弄されながらも、自分を見失うことなく郷土の人々の明日のために真摯に社会に向き合い生き抜いてきた周策は、七二歳の生涯を閉じ、万福寺の森で永遠の眠りについた。



この記事を書くに当り、「柿生の教育のあゆみ」「ふるさは語る―柿生・岡上のあゆみ」「川崎市議会史」等を参考にさせていただきました。

美しい日本に生まれて

—— 伝統文化を子どもたちに ——

志朋会代表 前川 志峰

私は、世田谷北烏山の、寺院が三十ほど立ち並ぶ東京の小京都といわれる寺町に生まれました。

四季折々の木々や草花、寺々の山門と屋根、廻廊、そして寒稽古の白装束の僧侶。盛夏の涼しげな絹や紗の墨染の衣。夕日に映える富士山と丹沢連峰。それぞれの色彩すべてが美しいものでした。

母が華道茶道の師範をしていたので、寺町の行事には花を活けお

茶会などを催しておりました。そんなときは晴れ着を着せられて二人の姉と母の手伝いもしました。

とくに四月八日の花まつりには、稚児さんが印象深いものでした。竹で編んだ白い象をみんなで引き、高僧が大勢色とりどりの衣に美しい袈裟を身につけて、経を唱えます。若い僧侶は、笙、ひちりき、横笛で雅楽を演奏し、その大行列は、それは綺麗で荘厳でした。

小学校を卒業したころに華道、茶道、琴を習い始めました。地域がらでしようか書道も盛んでした。お稽古というより、遊びという感覚でした。

高校時代によき師、美風池坊家元補佐、秋元佳峰と出会いました。苦しくとも自分で選んだ道です。花に向き合うと不思議に無となり、いやなことは忘れられました。

三年前、胃がんの手術をして体重が二十キロ減りました。寝たり起きたりの生活が六ヵ月も続き、体力も気力もなくなり、もう私は

だめなのかなと思うこともありました。しかし、今日生きている。それは家族と花、生徒があつてのことと感謝の日々を送っています。

折りしも文化協会の二十周年にあたり、文化祭の茶会を子、孫と三代で開けたことも嬉しいことでした。これも私が元氣になれた理由のひとつかもしれません。振り返れば五十年余りが過ぎ、花が好きで、憧れの師に励まされて続けてこられました。

華道、茶道、絵手紙と、毎年、小中学校からの依頼を受けて学校に向かいます。教育現場に立つてあらためて「おばあちゃん先生」が必要なことを実感します。

昨年十月に、ある中学校で絵手紙を教え、体験学習が終わり、男子生徒の「お礼のことば」を聞きました。彼は照れながらも「初めはどうなるのか不安でしたが、こんなに楽しく、解りやすく、わくわく、どきどきしながら筆に集中して、一時間でこれだけでできて、すごい授業をありがとうございました。ほくたただけでなく、たくさんさんの学校に行つて多くの人に教えてあげてほしいです」とあいさつをしてくれました。



この日はやはり、ことばの素晴らしさを中学生から学び、心がいつぱいになりました。一生懸命教えてきたことが実り、このことばを励みにもうひと頑張りできそうな気がしてきました。

若い頃、海外芸術交流で、ヨーロッパ五カ国に親善で出向きました。これからは、日本はもとより、世界中の子どもたちのために、命つきるまでさらに勉強を重ね、日本の美と心、伝統文化を伝えていきたいと思っております。

日本芸術いけ花協会正会員
海外芸術交流会会員



麻生区文化講演会

「今、世界で動いていること」を聴いて

田沢 梨子

去る、十月二十二日(土)新百合21ホールに於いて、麻生区文化協会主催、共催として川崎市教育委員会・川崎市生涯学習財団のご協力を頂き、講師に浅井泰範先生(武蔵野大学教授・前学習院大学講師・元朝日新聞ヨーロッパ総局長)をお迎えして、講演を催すことができました。

「今、世界で動いていること」それは何であろう。世界には不安が一杯だ。地震・津波・台風・洪水・異常高温、これ等は自然災害だが地球環境がおかしくなっている。BSE・鳥インフルエンザ・エイズなどの病気が次々と出てくる。人災には戦争・テロ・内紛・差別人権侵害などがある。

政治に対する信頼の欠如からくる将来への不安、身近な問題としては年金・雇用・税金が心配だ。

この十五年ほどの間に世界の潮流は変わった。

一九八九年、地中海のマルタでアメリカの前ブッシュ大統領とソ

連のゴルバチョフ大統領が会見して資本主義と共産主義の対立は終わった。ソ連の経済は苦しく、核兵器の開発・宇宙研究でも人とお金を大量に投入するアメリカが勝った。

これが第一の潮流で、超大国アメリカが出現して覇権国になった。ソ連崩壊は二十世紀最大の出来事である。アメリカで突出する三つのMは、ミリタリーパワー(軍事力)マネーパワー(経済力)メディアパワー(文化力)である。二〇〇一年九月のアメリカ本土のテロ以来危険を感じているが、フセイン、アフガニスタンもアメリカがたたいだ。

マネーもドルが世界の機軸通貨である。アメリカの映画・テレビインターネットは世界の七割ぐらいを占める。すごい力のアメリカとどう付き合うか、アメリカに同調するのは、イギリス・イタリア独自の文化を持ち対抗するのは、北朝鮮・イラン・キューバである。

ロシアと中国はアメリカにとって手強い。この三つの付き合い方はますます顕在化する。

第二の潮流は、グローバルゼーションの広がりである。

ひと・もの・かね・情報が地球規模で交流し拡大する。実際にはアメリカニズムで第一の潮流とぶつかる。

第三の潮流は、イデオロギーが消え、利潤追求指向が強まった結果、勝者と敗者がはっきり分かれ貧富の差が拡大した。そして、ソ連陣営の消滅で新自由主義・市場万能主義が勢いづいている。

世界人口六十三億の中で中国は十三億、このパワーはすごい。農村部と沿海部との経済の差は大きく、共産党も真剣に考えている。

世界には一日一ドル以下の生活費で暮らし、安全な水も飲めない人が十三億人もいる。

この格差をどうするか。

スイスのダボスに世界の指導者が集まり、豊かな国のダボス族といわれ、日本の政財界からも参加している。

これに対するのが反グローバルバリスムを掲げるシアトル族といわれる人達だ。

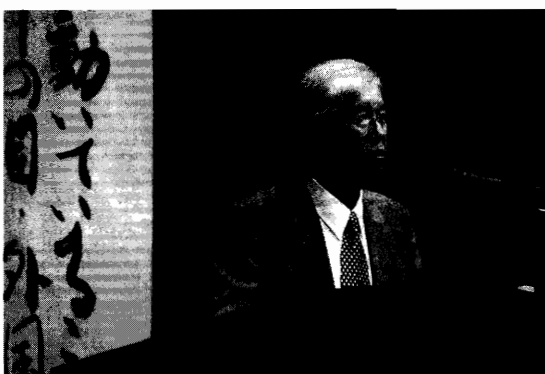
第四の潮流は宗教的な対立や民族的な紛争で敵味方に分かれ、第三の潮流とぶつかって大きなうねりを生む。

この潮流の中で、ブラジル・ロシア・インド・中国の四つの国は頭文字をとって、ブリックと呼ばれる脚光をあびている。

核兵器の拡散の危険・地球環境の破壊に対して必要なのは、危機回避の人類の意思である。

日本も国民の安全と世界の平和を願い、日本の将来を考えて対応して欲しいと願っている。

以上のような内容でした。



第三十一回 雑学教室

黒川の自然と文化を訪ねる

山室 樹声

平成十八年三月二十七日九時三十分、黒川駅に集合、まず川崎市黒川青少年野外活動センターに向う。ここは自然の中での体験を通して青少年が健全な心身、創造力を培う場として利用されているが、地元では旧黒川分校で通っている。黒川分校は大正十五年に開校し昭和五十七年に廃校となるまで僻地教育を支えてきた。今では建物をとり囲む桜大樹に当時は偲ぶばかりである。

○子等の声よみがへるかに桜かな 樹声

次いで黒川発電所を訪ねる。発電所とは名ばかりで遠く津久井の城山湖よりの地下送水管の中継地であるという。その水でわずかな発電を行っているのだ。

○はるばると来て賑やかな春の水 樹声

地元の俳人、吉澤篁村氏が平成十七年に建立した三基の句碑にま見える。氏の報恩の思いの詰った句碑に人間の原点を教えられる。木々の芽吹が美しい。地下水が湧き出ているあたりには野性の芹が育っている。

○下萌や忘恩諫む三師句碑 樹声

樹齡四百年余の山桜を目指して谷戸の小径を辿る。子狸が可愛らしい仕草を見せて行手をよぎる。川崎のチベットの実感する一時。山桜は二分咲きだが、花よりも紅色の若葉が美しく、その雄姿を嘆美する。右手上方には日露戦争で亡くなられた市川氏の鎮魂碑が建つ。日露戦争では柿生村から六名の戦死者を出した。こんな平和な山奥の地から戦火の只中へ送り出された青年達を思うと感無量である。

○山桜世の平安を祈りけり 樹声

汁守神社で昼食後曹洞宗の古刹西光寺へ到着、裏手に廻ると赤い前掛の似合う表情豊かな六地藏、その上に笑みを湛えた大きな釈迦牟尼仏の立像が出迎えてくれる。墓域は梅花苑と呼ばれ紅白の梅が咲き残っている。

○釈迦牟尼の守る墓苑や花辛夷 樹声

劇団民藝見学、その瀟洒な外観に感激。民藝は一九五十年、滝沢修、宇野重吉等によって創立され

一九八二年に黒川の地に移って来た。中に入り四月公演の大作「審判」の稽古場を見学、東京裁判を模した舞台に緊張する。

○民衆に根ざす劇団木の芽吹く 樹声

最終目的地の新しき街「はるひ野」を目指す。平成十六年十二月の新駅誕生により産まれた街だ。まだ空き地は目立つものの自然との調和をモットウとする街で歩道の広いのには驚かされる。駅舎はバリアフリー、屋根の風車と太陽光による発電設備などを備えた最新の駅だ。全国に先駆けて九年制の学校も開校予定で街造りは着々と進行中だ。

○雑学を少し増やしてうらけし 樹声



編集後記

▼巻頭頁の図柄新シリーズ第一号。佐藤英行さんは二科会に所属する作家で、麻生区のマークの作者でもある。修廣寺のご住職は菅原節生(二十六世)という。その奥様は当会監事の菅原陽子さんだという縁▼会長論説文の指定頁に「戌年にあやかって『犬の話』と提案されたのは杉本会長であった。今年の年賀状は愛犬の写真が多く、北海道の稚内では犬ぞりにより年賀状が配達されたとか▼見開きの「中島周策」を紹介した記は一年前の三八号で筆者が記した「飯塚重信」と関連する。郷土を背負って奔走した剛健な人々を小誌により偲ぶことができる幸。(松田記)

松田洋子・関森田鶴子・山田美美子
山口正太郎・千坂隆男・橋本 周

麻生区文化協会会報
からむし 第四十号
平成十八年三月三十一日発行
発行人 麻生区文化協会
会長 杉本長治
編集 麻生区文化協会
広報部
川崎市麻生区万福寺一―五―二
麻生文化センター内
☎ 〇四四―九五―一三〇〇